

山のトイレを考える会立ち上げの経緯から～括りきれない解決策

山のトイレを考える会 代表 横須賀 邦子

環境接点ミーティング「どうする野山のうんこ」が 2000 年に開催され、会場に入りきれない程の参加者でした。実際このような話題で盛り上がるとは、主催者側でも考えていなかったとあとで聞きましたが、中高年の登山ブームで百名山をはじめとして山のあちこちに糞尿と白いティッシュが目立ち登山者の不快をあおっていたことが認められました。ミーティングに参加した人々は既に携帯トイレの持ち歩きをしている積極派や、もって歩けないが、なんとか解決したいと模索している人など様々です。北海道の野山を美しく保ちたいと共通の強い意識がありました。また、昨年、別の機会を得て百名山であるトムラウシ山の現状をスライドで報告したところ、会場の参加者から何とかしなければという声があがり、考える会の原点が生まれた訳です。この問題と積極的に取り組んできた山岳会の自然保護委員や大学の研究者、登山者のメーリングリストから集まり、道内の登山者と行政にひろく呼びかけていこうと 2000 年 6 月「山のトイレを考える会」は設立しました。

まず“ 私たちにできる事から始めよう ” をキーワードに「紙の持ち帰り」をアピールしたのが昨年 8 月の第 1 回フォーラムです。フォーラムに寄せられたハガキに各地の取り組み状況や、解決したい方向などが綴られていて、この問題の関心の高さがうかがえました。会場からは、携帯トイレを配布しているクリーンアップ大雪運動や利尻山の報告もあって携帯トイレの良さに焦点を当てたかっこうになりましたが、同時に携帯トイレ廃棄についての運搬と処理の問題点も指摘され、討論の深さに及ぶ時間がなく今回につながっています。

昨年 9 月 23 日登山者のトイレに関する意識調査を銀泉台で行い、298 通のアンケートを回収いたしました。日帰り登山者が多い地域ではトイレ設置を望んでいる傾向があり、有料トイレに多くの方が賛同の意思を示しています。料金徴収の方法を巡って、誰がどうやって入山料を回収し、管理運用をどうするのか。また、入山を制限する方法ならオーバーユースの根拠となるデータが必要ですが、残念ながら関係機関で登山者数を把握しておらず、トイレを必要とする実態も

オーバーユースも証明できません。またトイレの形態として電気がなく水のないところでバイオトイレが可能か、ヘリによる搬出は膨大な経費が問題です。このようにトイレの形態ひとつをとっても単純なものではないことがお分かりいただけるとと思います。トイレの設置それ自体も景観を損なうと言う意味では良い解決策であるとは言えませんが、登山者の利用が以前とは違い増え続けていることからすれば、汚染を最小限にするために必要な措置だといえるでしょう。特に設置の検討を急ぎたいところは、利用は多くはないが汚染の進む美瑛富士避難小屋・利用の多い裏旭野営場・最も利用の多いトムラウシ南沼・縦走の中継地としてテント場になる沼の原・石狩岳の分岐点、日帰りの山として集中度の高いアポイ岳が挙げられます。仮に設置されたとしても、懸念される「料金を払えば責任終わり」というマナーの伴わない解決になるようでは困ります。山岳地ですから便利さを図る必要もなく、清掃管理も平地に比べて緩やかな運用で計画されることもポイントです。地域によっては携帯トイレを持参するのも必要で、使うに当たって持ち帰りをどこまでするのか、登山者の意識を広げるために道内でのアピール活動も必要になってくることでしょう。国立公園の計画上、トイレの設置は避難小屋や歩道に付帯する施設と考えれば可能と環境省から聞きましたが、許可を受け施設を設置するのは北海道で、その後の管理は観光協会等が委託されているのが現在のシステムです。このような国立公園の複雑な管理が、合理的解決を困難にしていることも、私たちは今分かってきたところです。括りきれない山のトイレ問題ではありますが、今日のフォーラムでは、利用している登山者と管理している行政、会場の皆様が解決策に向けて、議論を交換したいと思います。